

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32621

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K21374

研究課題名（和文）アフガニスタン近代改革運動とインド・ムスリム知的ネットワークの相互連関とその動態

研究課題名（英文）Mutual Relationship and Its Dynamics between Modernization Movement of Afghanistan and Indo-Muslim Intellectual Network

研究代表者

登利谷 正人（TORIYA, MASATO）

上智大学・総合グローバル学部・科研リサーチフェロー

研究者番号：90711755

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀後半から20世紀初頭の時期を対象に、アフガニスタンにおける近代化運動とインド・ムスリム知識人の知的ネットワークとの関係に焦点を当てて、一次資料の分析を実施することで分析を行った。その結果、アフガニスタンにおける国民統合政策が、南アジアのイスラーム改革運動と近代化を担いウルドゥー語を媒介とした形で発展したインド・ムスリム知識人たちの活動と相互に関連しつつ進められた点を具体的に検証することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、これまで研究の空白とも言える地域の一つであり、かつ現状を鑑みて直接現地への調査も困難であるアフガニスタン、およびパキスタンのアフガニスタンとの国境地帯の社会について理解するための基盤構築を促すことができた。これにより、優れた仏教関係の研究や現在の政治状況にほぼ限定された形で展開してきたアフガニスタン・パキスタンに関する地域研究に新たな視点を加え、今後の研究のさらなる進展の足がかりと日本との相互理解を促す基礎を固めることができた。

研究成果の概要（英文）：This study has been conducted by focusing on the relationship between the modernization movement of Afghanistan and the intellectual network of Indo-Muslim intellectuals in the latter half of the 19th century to the beginning of the 20th century on the basis of consulting a series of primary sources. As a result, It has been concretely able to verify that the policy of national integration in Afghanistan and the activities of the Indo-Muslim intellectuals, who had developed the Islamic reform movements and modernization in South Asia by means of the Urdu language, were interrelated each other and developed remarkably.

研究分野：地域研究

キーワード：アフガニスタン インド・ムスリム ウルドゥー語 パキスタン 英領インド

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アフガニスタン地域研究の基盤は、19世紀前半から20世紀に至る長期間に渡り東隣のインドを植民地として維持するためにアフガニスタンと三度に渡る戦火を交えたイギリスによる民族誌や歴史、さらには言語・文化に至る幅広い分野での研究蓄積に大きく依存してきた。このような、イギリスによる「植民地的知見」の上に積み重ねられ、米ソ両国が自らの政治的動機に基づいて実施したアフガニスタン研究は、その後のソ連崩壊により超大国となったアメリカによる研究が学術的重要度を増すことになったが、このようなアフガニスタン研究の現状については、イギリス時代の「植民地的知見」が形を変えて影響し続けているだけであるとの鋭い指摘も先行研究によりなされてきた。以上のようなイギリス側史料に大きく偏った研究環境に鑑みて、研究開始前の段階でペルシア語・パシュトー語などの現地語で記された一次史料を用いた長期的かつ歴史的視座に基づく分析を重視し、アフガニスタン近代史についての諸課題に関する研究を行い、新たな研究基盤の構築に努めてきた。

アフガニスタン近代史の先攻研究における具体的な研究テーマが限定的であった中で、近年における研究の進展に伴い、19世紀以降のインド・ムスリム知識人によるイスラーム近代改革運動の急速な発展により、その媒介言語となったウルドゥー語の出版物を通じた知的ネットワーク「ウルドゥー語圏」に着目した研究への提言がなされた。

2. 研究の目的

本研究では上記の研究開始当初の背景を踏まえ、いまだ実態解明がほとんど進んでいない「ウルドゥー語圏」の影響を受けつつ進展したアフガニスタンにおける近代改革運動の諸相と、英領インドのパシュトゥーン社会運動組織の活動についてその実態を明らかにするとともに、同時期のインド・ムスリムの知的ネットワークとの関連についても分析することを研究の目的とした。

具体的に本研究では、19世紀後半から～20世紀前半の時期を対象に以下の三点について研究を実施する。

- (1). 19世紀後半から20世紀初頭の時期を対象に、アフガニスタンを保護国化したイギリスと、その後援によって統治者となったアミール・アブドゥル・ラフマーン、そして各地に存在した地方小勢力との三者間関係についてイギリス側文書史料とアフガニスタン側史料の相互分析を行い、地方諸勢力の活動の及ぼした影響と、宗主国であるイギリスの影響力がどのようなものであったのかという点について検討した。加えて、現在も英領インド・アフガニスタン間で19世紀末に設定された境界である「デュアランド・ライン合意」の締結過程についても分析を行い、国境地帯をめぐるアフガニスタン・英領インドの対応について検討する。
- (2). 1930年代のアフガニスタンにおける近代化政策について、知的エリート組織として設立された「カーブル文学協会」の活動を通じて分析し、政府が目標としていたアフガニスタン国家の輪郭や近代化政策の遂行過程や言語・文化政策について分析した。また、同協会とインド・ムスリムとの文化的・思想的連関についても検証し、当時の「ウルドゥー語圏」としてのアフガニスタンとインド・ムスリムとの知的連関の実態について検討する。具体的には、著名なインド・ムスリム知識人からの寄稿や、同協会メンバーら

による論評の分析を通じて双方の知的交流のあり方とその変遷を分析する。

- (3). アフガニスタンとインド・ムスリム間での共通の知的空間「ウルドゥー語圏」に関して、アフガニスタンで支配民族パシュトゥーンを中心とした国民統合政策とパシュトー語を重視する言語・文化政策が推進され、「カーブル文学協会」が「パシュトー・アカデミー」へと統合される時期にあたる 1930 年代末から 1940 年代を対象に、その動態について分析する。
- (4). 英領インド側でパシュトゥーンの世界改革・教育改革を推進し、大衆運動として活発な政治活動を展開した「神の奉仕団」の活動とアフガニスタンの近代改革運動との相互連関について、双方が共通して目指したパシュトー語を媒介とした近代化・社会改革を中心に比較検討し双方の活動の特色について検討する。

3. 研究の方法

上記の研究実施のため、一次資料の調査・収集、およびそれらの分析を行うことを中心に研究を実施する。具体的な研究方法は以下の通り。

- (1). 「カーブル文学協会」は、1930 年にアフガニスタンにおけるペルシア語文学の発展と書記言語の統一などを目的に設立された。しかし、同協会には著名な知識人の多くが直接的・間接的な形で関与しており、言語・文学・文化活動のみに留まらず、政府の近代化政策や指針についての多くの論評も多数執筆・寄稿された。特に 1931 年から定期的に発行された機関誌『カーブル』は、アフガニスタンにおける初めて本格的な知的エリートたちによる交流媒体であった。文芸・思想の分野においてもムハンマド・イクバルをはじめとするインド・ムスリムの高名な知識人たちからの寄稿を受けるなど、インド・ムスリムとの連携も密接であった。本研究では、先攻研究においてもほとんど用いられてこなかった上記の定期刊行物や、「カーブル文学協会」のメンバーであった著名人たちの自伝、新聞「アニス」などを用いて、1930 年代を通じたアフガニスタンにおける近代改革運動の諸相と、インド・ムスリムとの知的連関の実態について検討した。
- (2). アフガニスタンに隣接する英領インド・北西辺境州はその住民の多数をアフガニスタンの支配民族パシュトゥーンが占めているが、20 世紀初頭よりパシュトゥーン民族主義運動組織「神の奉仕団」が活発に運動を展開し、大衆運動と化した。同組織はパシュトー語を媒介としてパシュトゥーンの世界改革・啓蒙運動を実施するとともに、執筆活動を通じアフガニスタンを含めたパシュトゥーンの世界統一を求めた。この「神の奉仕団」の目指したパシュトゥーン国家「パシュトゥニスタン」建設をアフガニスタンとの関係でどのように考えていたのかを、多数の関係者の回想録や著作、さらにはイギリス側の文書資料を中心に検討し、アフガニスタンにおける近代改革運動との関連でその活動について分析した。
- (3). 19 世紀末からカーブルを中心とした中央集権国家建設が進められると、英領インドとの国境地帯パシュトゥーン諸部族との関係・連絡手段を重視し、パシュトー語書記官が宮廷に配置されるなど、パシュトー語の重要性は高まりつつあった。さらに、インド・ムスリムによる知的ネットワーク「ウルドゥー語圏」を介して言語による共通の知的空間の形成とその影響を理解したアフガニスタンの支配者層や知識人たちは、パシュトー語の国語化と領域内での普及・発展を意図し、「パシュトー・アカデミー」を設立し

た。1940年には「カーブル文学協会」が「パシュトール・アカデミー」へと統合され、もともとペルシア語で記されていた機関誌『カーブル』もパシュトール語で記述される雑誌へと変更された。また、英領インド側でもムスリム国家・パキスタンの建設運動が高揚し、ウルドゥー語がその領域国家における国語として設定されることが既定路線となると、「ウルドゥー語圏」の知的ネットワークは変遷を余儀なくされた。

そこで、特に1930年代後半から1940年代におけるアフガニスタンとインド・ムスリムの知的ネットワークの動態を、「パシュトール・アカデミー」の創設過程、その活動を通じたアフガニスタンのパシュトゥーン主義政策の内容、および英領インドのムスリム国家構想におけるウルドゥー語の地位の変化という点から比較検討した。具体的には、「パシュトール・アカデミー」の刊行物や関連する人物たちの著作、およびパキスタン構想に関するインド・ムスリム知識人によるウルドゥー語の定期刊行物や、イギリス側の外交文書史料などを用いて、アフガニスタンとインド・ムスリムとの知的ネットワークの変容とその動態を検証した。

- (4) 研究遂行に必要な一次資料を調査・収集するため、イギリス、およびパキスタンにおける国立図書館や文書館における一次資料の調査・収集を実施した。加えて、関連するウルドゥー語、パシュトール語を中心とする現地語資料文献の収集を実施した。

4. 研究成果

本研究においては、インド・ムスリム知識人たちの知的ネットワークとアフガニスタンの近代化運動に関連する一次資料文献の収集を一定程度行うことができた。特に、パキスタン調査において、パシュトール語・ウルドゥー語の資料収集を実施し、本研究課題をさらに発展させた形での、今後のアフガニスタン・パキスタン地域研究に資する一次資料の調査も実施することができた。

研究目的に即して本研究において得られた成果の概要について以下に記す。

まず、19世紀後半から20世紀初頭の時期において、アフガニスタンを保護国化したイギリスの諸政策を分析した結果、当初イギリスはアフガニスタンを地方ごとに分割統治する方針を定めたものの、その後の情勢変化により統一的な政体として維持しつつ、その統治を自らが推戴したアミール委ねるという形をとることに決定した過程が明らかになった。また、イギリスはこのような統治政策の変遷に応じて、19世紀後半にはアフガニスタンの国境画定を進め、その勢力範囲を明確化しつつ、アフガニスタン国内の地方勢力にも一定の影響力を維持していた点を検証した。

20世紀初頭のインド・ムスリムとアフガニスタンとの関係を分析するため、同時期に様々な理由でアフガニスタンに滞在していたインド・ムスリム知識人が記したウルドゥー語記録を調査・収集し、主要な記録について分析した。ウルドゥー語記録からは、当時のアフガニスタンの政治・社会情勢、あるいは当時首都カーブルに滞在していたインド・ムスリムに関する様々な情報など、アフガニスタン側の記録では全く確認できない新たな情報が記されていた。さらに、アフガニスタン側の記録と比較検討した結果、当時のアフガニスタンとインド・ムスリムたちとの人的交流、および当時のアフガニスタンの重要人物たちの性質が実際の政策などの多大な影響を及ぼした点が明らかとなった。

また、20世紀前半の英領インドにおける「神の奉仕団」を中心とする、パシュトゥーンによる地域ナショナリズム運動とアフガニスタン側に動向について、一次資料の比較検討

を実施した。さらに、現在に至るまでの両国におけるパシュトゥーンの文芸・歴史・文化の調査研究、および普及機関として機能してきたカーブルとペシャーワルの「パシュトール・アカデミー」における出版物の分析も行った。この結果、特に文学史をめぐる解釈や歴史認識においてアフガニスタンと現在のパキスタンのパシュトゥーン知識人たちの中で、大きな差異が生じた点、およびその原因などについて明らかにした。

以上のような研究成果に加え、今後さらに解明を進めなければいけない個別の課題も多く発見された。今後、さらに本研究の成果を発展させていくことは必須である。なお、研究実施期間において、上記研究内容に関する分析結果を、論文・著書、あるいはシンポジウム・研究会などを通じて随時報告することも実施した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 登利谷 正人	4. 巻 265
2. 論文標題 パキスタン・アフガニスタンとの友好的交流の歴史 - ウルドゥー語記録から見るイクパールの関与を中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 パーキスターン	6. 最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 登利谷 正人	4. 巻 930
2. 論文標題 再びアフガニスタンを忘れないために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 18 - 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 登利谷 正人
2. 発表標題 アフガニスタン内乱（1928-29年）におけるインド・ムスリム知識人の関与とその影響：ムハンマド・イクパールの事例を中心に
3. 学会等名 日本中東学会第34回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 登利谷 正人
2. 発表標題 パキスタンの社会福祉
3. 学会等名 南アジア地域研究・東京外国語大学拠点FINDAS 2018年度第4回研究会「南アジアの社会福祉」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 登利谷 正人
2. 発表標題 アフガニスタンにおけるインド・ムスリム知識人の活動と人的交流（南アジアのムスリム知識層による社会宗教改革とその展開 - 教育活動と広域的ネットワークに着目して）
3. 学会等名 2018年度上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・大学院生・若手研究者イニシアティブによるシンポジウム・ワークショップシリーズ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 登利谷 正人
2. 発表標題 パシュトゥーンの言語・文学をめぐる諸状況 - 言語政策の変遷と文人交流 -
3. 学会等名 大東西アジア研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 登利谷正人
2. 発表標題 南アジアにおける近代化運動の展開
3. 学会等名 日本・オマーン協会市民講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 登利谷正人
2. 発表標題 『隠された秘宝』をめぐるパシュトー文学史上の諸問題
3. 学会等名 アフガン研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 登利谷正人
2. 発表標題 アフガニスタンにおける近代化・国民統合政策の展開：英領インド政府とインド・ムスリムとの関係を中心に
3. 学会等名 「アジア・アフリカにおける諸宗教の関係の歴史と現状」研究会ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masato TORIYA
2. 発表標題 The Interaction of Intellectual Thought and People between Afghanistan and Ottoman Empire
3. 学会等名 Second European Convention on Turkic, Ottoman and Turkish Studies (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Masato TORIYA
2. 発表標題 Indian Muslims and Russia in the 1910s and 1920s: The Case of Zafar Hasan Aibak's Ap Biti
3. 学会等名 Slavic Eurasian Research Center 2015 Summer International Symposium, (Junior Scholars' Session) (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Masato TORIYA
2. 発表標題 The Political Situation and Social Trends of Pashtun in Afghanistan and Pakistan
3. 学会等名 NIHU Program "IAS-INDAS South Asia and Islam Joint Research Project" 2015 International Workshop (招待講演)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 登利谷 正人
2. 発表標題 ウルドゥー語資料に見る20世紀初頭のカーブル
3. 学会等名 第52回南アジア研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 登利谷 正人
2. 発表標題 近代バシュトゥーン社会における水上交通と政治 - 中村哲医師の活動地域を中心に -
3. 学会等名 2019年度 第5回 大東 西アジア研究会 「乾燥地の生活水資源利用と地域社会の変化 歴史・現在・未来 」
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 登利谷 正人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 340
3. 書名 近代アフガニスタンにおける国家形成 - 歴史叙述と第二次アフガン戦争前後の政治動向 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考